

海外だより

カルカッタとサンスクリット・

コレッジのこと

山下幸一

カルカッタでは、冬が文化の季節である。日本の秋にあるように、様々の催物がある。例えば、古典舞踏、映画祭、四日間ぶつ通しの音楽会など、主に芸術的方面のものが多し。その中であつて、今年、一九八三年初頭に西ベンガル佛教徒協会が催した「アティッシュューデーパンカル生誕千年祭」は出色であつた。カルカッタからの報告として、希有なる、また、筆者の興味を最も惹いたこの祝祭から綴つてゆきたい。

そのプログラムは、一月二十九日から三日間だった。初日、午前九時、開会式。式場のラビンドラシヨドンに、ダライ・ラマ親下をはじめ、スリランカ、ソ連、シッキム、ラダック、パングラーデシユ、イギリス、日本から、来賓として、高僧、名士、学者を迎え、それに加えて、一般招待者一千数百名が集まつた。マンガラチャラン、三帰依、五戒を唱和し、僧のパーリ語での読経に、会場をうめた人々が「スダー、スダー、スダー

ー」と讃嘆して、祝典が始まつた。午前は、来賓の挨拶で終始した。

午後は、西ベンガル佛教徒協会の本山から、国立博物館まで、各国の佛教徒たちが行列をした。それに引続いて、国立博物館で「アティッシュューデーパンカルと佛教美術展」のテープカットと開会式が、ダライラマ親下の手によって行なわれた。展示品は、チベットのタンカ、マンガラであつた。

それから、会場を国立博物館のオーデトリウム・ホールに移して、アティッシュューデーパンカルに関するセミナーが行なわれた。この分野に疎い筆者には、興味ある事ばかりであつた。特に、Prof. Alaka Chatopadhyayaの研究発表は面白かつた。彼女には、*Atisha and Tibet* (Mithal Banarjass) という研究があるという。彼女は、アティッシュューデーパンカルの業績を次のように讃えた。「彼はチベットを征服したが、それは軍事力によつてもないし権力によつてもない。それは、慈悲心と、智慧によつてであつた。」

インド史において、佛教はイスラムの侵入とともに滅亡したとされる。しかし、現在も生きるベンガル佛教徒を思うとき、佛教は滅んだのではなくて、辺境へ追われたと言ふべきであろう。パングラーデシユにも、西ベンガルにも、少数ながら佛教徒は脈々と生き続けている。彼らについての民俗学的調査などは、どの程度になされているのであろうか。興味ある問題である。

さて、カルカッタにあつて、最も古い伝統をもち、最も重要

なのは、ベンガル・アジア協会である。今年は、二月七日に、第一九九回目の年次総会があった。いつもの通り、任期満了の役員の改選、昨年度の活動・決算報告、協会賞などの授与が行なわれた。本協会も、年々運営の経済的悪化が進み、来年に催すべき設立二百年記念行事をいかに行なうかが問いただされた。それから、未整理の、しかも重要なマニエスクリプトの研究がなされないのは、世界の学界に対する協会の無責任だという、遺憾の声もあがりたりした。

そのような経営難の現状下、わずかに五冊の本が出版された。その中に、佛教関係に次のものがあった。Some Psychological aspects on early Buddhist Philosophy based on Abhidhamma-kośa of Vasubandhu, by Dr. Aruna Halder, 1982。その中本協会には、西ベンガル州及び近辺在住の学者はほとんど会員になっている。あるいは、本協会の会員であることは、一種の名誉であると言えよう。年次報告書によると、現在の会員数は、団体二四、個人一一一三である。

カルカッタは、往時インドの首府であったことから、数多くの研究機関をもち、研究者の層も厚いといえる。教育水準、文化水準も高い。そのような、学者、知識人、文化人、学生の欲求を満たしてくれるのが、毎年行なわれるブック・フェアである。毎年二月の中旬、今年は五日から二十日まで開かれた。インド中から主な出版社が参加し、一割以上の値引きが取り決められている。これは、インドで最大のブック・フェアだと、カルカッタの人は胸を張る。三百軒近くの仮設テント書店が、ビ

クトリア・メモリアル横の公園に軒を並べる。一軒ずついいねいに見ていくと、四、五日かかるほどである。教軒の古書店も出ていて、時に掘出し物もある。もちろん数としては、ベンガル語のものが圧倒的に多い。ブック・フェア期間中に、それはこれに合わせたのであろうが、サラスヴァティーの祭りがある。今年は二月十八日であった。ベンガル人の祭り好きは自他ともに認めるところであり、十月のドウルガー・ブージャから三月のホーリーまで祭り続きと言っても過言ではない。数多いブージャ(祭り)の中で、サラスヴァティーのブージャは、最もしつとりしているように思われる。

篤信の各家庭、町内の辻々、学校に、大小様々のサラスヴァティー女神像を祀り、学芸の成就を祈願するのである。サラスヴァティー女神は、美しく着飾り、手にヴァーナという弦楽器と経典を持ち、ハンサ(白鳥)を伴っている。学問と芸術の女神である。学生は、よい成績がとれますように、などと祈る。日本の天神さんを思い出させるものである。ところで、サラスヴァティーは、なぜハンサを伴っているのか。識者に尋ねると、多くの人は次のように語ってくれた。サラスヴァティーは、ヴェーダ時代には、河の名前であり、かつ、その女神であった。よって、水辺に棲むハンサは、美と純粹の象徴として彼女と結びついた。しかも、ハンサは、伝説では、これは今もそう信じられているのだが、水面に散らされた牛乳を、嘴で選り分けて食べることができる。そのように、

学芸に志す者は、自分の教養になるものだけを世界の雑多の中から学び摂らなければならない。ハンサはその象徴でもある。それ故に、学問と芸術の女神サラスヴァティーに伴なっているのである。

しかし、このような説明には、何故に河の女神が学芸の女神になったかが語られていない。これもまた筆者の興味の向くところである。 *Yaksha Gopika of Jyotiṣmatī* 女神の興味の向くところである。

さて、サラスヴァティーは、中国を経て日本に伝わって来た。それが弁(財)天である。両者の関係を究明した次のような良書がある。著者は、在カルカッタ日本国総領事館の文化担当官である。 *Hindu Divinities in Japanese Buddhist Pantheon*, by Dr. Dwijendra Nath Bakshi (Bentley Publication) Calcutta, 1979.

そのサラスヴァティー・プージャは、伝統あるカルカッタ大学のサンسكريット・コレッジでも、学生が主催して行なわれる。その女神像は、筆者が見た中で最も美しいものである。

筆者の指導教授がパーリ学科の主任を務めている関係上、足繁く通い親しんでいるので、次に、このカルカッタ大学を紹介しようと思う。

カルカッタには、「大学」が三つある。ラビンドラ・バラタ大学、ジョドブル大学、そしてカルカッタ大学である。前者は、一構内に学部から大学院までであるのであるが、カルカッタ大学というのは、前二者以外のすべてのコレッジ(学部)と大学院の総称である。従って、或る一つのコレッジを卒業すれば、

「カルカッタ大学」を卒業した、というように言われるのである。しかしながら、ふつうに、「カルカッタ大学」と言えば、コレッジ・ストリートにあるカルカッタ大学本部を指すのである。そこはまた、文学部の修士課程のキャンパスでもあり、大学の中央図書館、アストリッシュ博物館もある。

この大学本部の、通りを隔てたすぐ前に、州立サンسكريット・コレッジ (Government Sanskrit College) がある。このコレッジの前身は、Fort William College と呼ばれ、イギリスの文官、特に、司法行政吏にサンسكريットの知識をつけるためのものであったと聞く。サンسكريット・コレッジとしての礎石は、一八二四年二月二五日と刻まれている。 *Fort William College* 毎年二月二五日には開学記念行事が催される。筆者は二年続けてそれを見たが、面白いのは、古式にのっとった論理学の対論である。一対一の対論であるが、対論者各々に、一人ずつ補佐役が付き、審判役が一人、合計五人がベッド程の大きさ高さの段上に坐す。対論は主にサンسكريット語で進行する。例えば、「比量」の定義を出し合い、それについての所説を開陳するという風に、まるで論理学の古典を読むのと同じである。

このように、古いサンسكريットの学問の伝統を保持して今に至る本コレッジは、開学当時、伝統的なサンسكريット学習と、ヨーロッパ流の研究方法を合わせて、新しい研究母体をめざし、H. H. Wilson らの委員によって運営された。その理想は、ベナレスの Sampurnananda Sanskrita Viswavidyalaya と同じである。 *History of Sampurnananda Sanskrita Viswavidyalaya* 同様に、

最初期、主たるメディアはサンسكريット語であった。学生は十年間のコースで、文法・文学・修辭学・哲学などを修めなければならなかった。一八二六年に天文学、一八二七年に英文学、一八三七年に孟加拉文学が講義されるようになった。一八五一年に Under Graduate College として公認され、初代学長には Pandit Īśvarachandra Vidyāsagar がその任に就いた。彼の任期中一八五七年に Art Department (文学部に相当する) が University of Calcutta の組織下に置かれた。続いて一八五八年に Tol Department が設置された。それは Dr. E. B. Cowell が第二代学長職に就いた年である。一九五一年には Post-Graduate Research Department が始まって現在に至っている。五つの Constituent College of the University of Calcutta のひとつとして重要な地位にある。

以上のような略史をたどって、一八五一年より、インド研究の総合化をめざして整備された Sanskrit College の学科組織は、現在のとおり、(1) Post-Graduate Training and Research Department, (2) Oriental Pāṭasālā or Tol Department, (3) Degree College of Arts の三部門より成っている。(1) Post-Graduate Training and Research Department には、ヴェーダ学、インド哲学、インド学、サンسكريット語・文学、スムリテイ・プラナーナの各専門があつて、それぞれに著名な学者一〇二名が指導にあたっている。MAある者は PhDをとった若い研究者たちは、ここで純粹に伝統的な学習をするとともに、近代的研究も行なっている。その成果は研究誌 "Our

Heritage" 或は機関誌 "Calcutta Sanskrit College Research Series" として出版されている(後述)。

(2) Oriental Pāṭasālā or Tol Department を修了すると Tirtha, Mahacharya という称号が与えられる。Tirtha 一〇三年のうちにやうに三年の Mahacharya コースがある。十数名の Senior Research Fellow of the Department がより伝統的の教授がなされている。専門部門は現在の Upaniṣad, Veda, Literature, Vyākaraṇa, Mughdhavāda, Smṛti, Saṁkhya-yoga, Vedānta, Jyōtiṣ である。

(3) Degree College of Arts または College Department で学生は BA の学位をとる。Sanskrit College の教育の本体であるが、学生数は制限されてきてきわめて少ない。第一から第三学年合計百名前後である。専攻(専任教官の教)は Sanskrit (5), Pālī (4), Linguistics (4), Ancient Indian and World History (3) である。また Presidency College との交換授業が一九五〇年より行なわれ、学生は必要に応じて、一般歴史学と哲学の授業を先方で受けることが出来る。Degree College of Arts 次は付属施設の紹介をしよう。

図書館には、八七、七八一冊以上の書籍、一二〇種の雑誌が蔵せられている。そして、他大学、研究所の学生たちにも利用出来るよう便宜がはかられている。開館時間は午前七時から午後五時までで、年中無休である。

別館 Bharati Bhavan は Post-Graduate, Training and Research Department の研究者のための教室および研究室

その Manuscript Library がある。その Manuscript は
二三〇〇〇以上が収集されている。その内容は A Descrip-
tive Catalogue of Manuscripts, 3 vols. に詳しく知ることが
出来る。

また、本館には Haraprasad Sastri Museum of Art
and Archaeology がある。五〇〇点以上の標本が Ancient
Indian History の授業のために収集せられてゐる。

出版部 (Publication Department) は、その "Our Heri-
tage" が毎年出版される。各巻二冊で現在第一五巻まで出版さ
れている。また "Calcutta Sanskrit College Research
Series" の下で幾つかの Texts 二冊、Studies 二冊、Lex-
icons 五冊が出版されている。その内の佛教関係のみをらんで
は、その

Mahāvastu Avadāna, Vol. I, II, III, Ed. by Dr. R. G.

Basak.

Kundamalā of Dīnaga, Ed. by Dr. K. K. Dutta

Vijñaptimātrata-siddhi, Ed. by Dr. S. Chaudhuri

(以上ラキスト)

Origins of the Early Buddhist

Buddhist Centres in Ancient India, by Dr. B. N. Cha-

udhuri

Facets of Buddhist Thought, by Dr. A. K. Chatterjee

Analytical Study of the Abhidharmakośa, by Dr. S.

Chaudhuri

などがある。

Sanskrit College の事業として、次の二つの辞典の編纂があ
る。

Bharatiya Darśana Kōśa (in Bengali) : これはインド哲

学のほとんどの分野の術語の辞典である。ある篤志家の
基金 'Kaidas Mullick Scholarship Fund' によって一九七
五年、その編纂と出版事業が始まった。現在 Nyāya-Vaiśeṣika
と Sāṅkhya-Pātañjala の二冊が出版されている。

Critical Pali Dictionary: Trenchner によつて始められた
この辞典の編纂は今や国際的プロジェクトとなった。ロンドン
ーゲンにある the Royal Danish Academy of Sciences and
Letters のインドにおける協力センターとして Sanskrit Col-
lege がインド政府により選ばれ、割当原稿がロンドンーゲン
に送られている。

最後に学生生活について一言触れておこう。Degree Course
は三年で、大抵六月に新学期の授業が始まる。午前一〇時から
午後四時二〇分まで、五〇分授業の七講時が週日の授業である。
授業内容は、すべて教官の講義ないしは講読研究であり、学生
がテキストを読んで発表するようなことはない。そして、我々
の大学の場合と異なる点は、授業が全て卒業試験のためである
ことである。二年を終える時に、専門四科目、関連六科目。三
年を終える時に、専門四科目の試験が University of Calcutta
の統制のもとに行なわれるからである。それ故、授業は教官か
ら教わるという形式をとる。卒業論文はない。試験の内容は、

われわれの定期試験の場合と大差はない。例えば、「アショールカ王碑文について知ることを述べよ」とか、サンスクリット、或はパリーのテキストから一節が抜き出されていて、それを訳し解説せよ、といったようなものである。

学生は概してまじめである。しかし、彼らは、将来の仕事に不安を感じている。文学部を卒業しても、更にはE.P.A.を修了しても、きびしい就職難である。サンスクリットやパリー語を勉強している学生に尋ねると、就職のことは頭痛のたねだけど、勉強が好きだからという返事であった。

現在カルカタ大学には、筆者を含めて四名の日本人留學生が在籍している。皆の一樣の感想は、日本でするより研究がはかどらない。それに馴れてしまえば押し流されるので、自分の勉強のペースを保持し続けることに気をつけなければならない。そうでなければ、時間が頭初の予定より二倍はかかってしまう同感である。

大谷大学佛教学会編『佛教学への道しるべ』文栄堂刊

B 6判 370頁、定価2,500円(〒250円) 発売中

- 第一編 インド佛教研究への道しるべ
- 第二編 中国佛教研究への道しるべ
- 第三編 インド学研究への道しるべ
- 第四編 日本佛教研究文献要覧

執筆：舟橋一哉、佐々木現順、佐々木教悟、櫻部建、安井広済、
稲葉正就、横超慧日、雲井昭善、白土わか、坂東性純

もよりの書店又は文栄堂書店にて購入して下さい。
本会会員・賛助会員には会員割引価格でお頒けします。問合せは「大谷大学佛教学会」まで。